
梅雨前線

-聖-

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅雨前線

【Nコード】

N4023E

【作者名】

- 聖 -

【あらすじ】

梅雨の時期、学校をサボって公園に立ち寄った薫。そこで出会ったのは、目の見えない、絵を描く青年だった。

降り続く雨の中を、1人の高校生が歩いて行く。

花山薫、17歳。4月から2年生になったばかりの少女である。

薫は傘をグルグルと回して雨水を飛ばしながらトボトボと歩いていた。時刻は8時過ぎ。もうすぐ学校の始まる時間であるが、彼女の向う先に学校はない。

サラリーマンたちが出勤してすっかり静かになった住宅街と、雨に打たれながら両脇に立ち並ぶ街路樹。めばしいものといえはそれぐらいだった。

ちょうど梅雨の時期ということもあり、連日雨が続けていた。こゝもジトジトとした毎日を過ごしていたら、気分が乗らないのも仕方が無いというやつである。

「めんどくさ……」

少し下がってきたスカートを上げながら、薫がつぶやく。どうやら最近少し痩せたらしい。お菓子も食べるし、ご飯もそこそこ食べるし、別にダイエットをしているというわけでもないのだが。

カオちゃん、痩せたね。

学校に行けば、きっと友達にそう言われるだろう。別に理由はなかったが、薫はそうやって絡まれるのがなんとなく嫌だった。友達が嫌いなわけじゃないのだ。ただ、なんとなく面倒なだけ。

「別に、学校行かなくなつたっていいしょ」

自分に言い聞かせるかのように、薫がつぶやく。

口ではこんなことをいつているが、今まで学校をサボったことなどなかった。今日だって、普通に起きて、普通に家を出て、電車にのって、駅にきた。そしてもう何分か後には、学校で友達とどうでもいい話をする予定だった。

しかし、今日はなんとなく学校と違う方向に足が動いたのだ。まだ新学期も始まって2ヶ月ばかりだというのに、いや、だからかも

しれないが、気分がヤケに沈んでいる。

さて、これからどうしようか……。

カバンについた雨水を払いつつそんなことを考えながら歩いていると、小さな公園が右側に現れた。

ブランコと、すべり台と、砂場と、ベンチが2つ。どこにでもあるような、ごくごく普通の公園。真中に小さな桜の木が立っているのが、せめてもの救いというところか。もっとも、今では花も散ってしまい、すっかり惨めな風貌を晒している。

その桜の木の下に人影があることに気付いたのは、薫が公園に足を踏み入れてすぐだった。

年の頃は20ぐらい。濃い顔立ちで、ひよろつとした背の高い青年である。彼は大きな傘を差しながら折りたたみの小さなイスに腰を掛け、白くて大きな紙を小脇に抱えながら、桜の木をぼーっと見上げていた。

今から桜の木の写生でもするのだろうか。こんな雨の中、桜の花もとつくに散ってしまったているというのに。

その青年になんとなく興味がわき、薫はゆっくりと近づいていった。

「おはようございます。寒そうですね」

特に何かを意図していたわけでもなく、薫はいった。ただ単純に、彼の服が雨のせいでかなり濡れている。それだけの理由である。

「おはよう。学校かい？」

「学校だけど、行かなくていいかなって思っ」

「そうかそうか」

彼は薫をとがめる様子などまったくなかった。

むしろ、学校に行かないことなど普通だ、という感じの表情である。

「何してるんですか？」

薫が訊ねると、青年は濡れた画用紙に目を落とした。

「うーん、別に」

彼は笑いながら答えた。

ふと、薫はそこで違和感に気づく。

なにやら青年の動きがぎこちないのである。もしかすると……

「ああ、僕目が見えないんだ」

薫がいぶかしげな表情をしていることに気づいたのか、彼は世間話を切り出すかのような気楽な口調でそう告げた。

目が見えないのに、絵描きだなんて。

彼の目が見えないことよりも、薫はそっちに意識が傾いた。

「春にはよくココに来て、絵を描いていたんだけどね。もちろん目が見えないから、人から聞いた話で想像した桜を描くしかないんだけどさ」

彼はそう言いながらケラケラと笑った。

ふと、雨が上がっていることに気づき、薫は傘を閉じた。空を見る限り、またいつ振り出してくるか分からない。

だからというわけではないが、薫はとっさに彼にむかってこういつた。

「じゃあ、あたしを描いてください」

そんなのムリ、と言われるかと思っていた。しかし、青年は興味深そうに「ほうほう」とうなずき、

「じゃあ、君がどんな子か僕に細かく説明して」

と言いながら、雨で濡れた画用紙を広げ、鉛筆を取り出した。

薫は色んな話をした。

髪型、身長、顔立ち、体格、その他もろもろ。

このときほど、自分の体をじっくりと見回したことはないだろう。さらには、絵に描けるわけもないのに、性格や好きなもの、嫌いなもの、しまいには過去の思い出話も話していた。決して意図していたわけではなく、ごく自然に。

「どう？」

しばらくして、彼は薫を描いた画用紙を開いて見せた。

「うーん、変」

薫は素直にそういった。

決してうまいわけではない。線もバラバラ、形もグチャグチャ。かろうじて女の子が描かれていると分かるか分からないか……。

「ただ、薫が述べた特徴はそれなりに捉えられている気がした。」

「あはははっ、僕に上手さを求めるほうがヒドイよ」

彼は声を上げて笑った。つられて薫も笑顔になる。

「でも、こういう機会でもないと、自分をじっくり観察することなんかないだろう？」

「……確かにないですね」

薫は深々とうなずいた。

青年はしばらくニコニコしていたが、やがて薫の姿を書いた画用紙を、ベリツとスケッチブックからはがした。

「これ、記念にあげるよ」

そう言いながら差し出された絵の上に、再び雨粒が落ち始める。

「また遊びに来てもいいですか？」

「もちろんさ。だから学校いっついで」

「はい」

薫は絵を大切そうにしまうと、傘を開いた。

桜の木の枝にあたって分散した雨粒が、パラパラと降り注ぐ。また雨脚が強くなりそうな感じた。

「風邪引かないでね。いつてきます」

「はいよ、がんばっておいで」

薫は大きく手を振り、公園を後にした。

チラリと後ろを振り返ると、彼はまだ桜の木ほうに顔を向けていた。雨が強いせいで、髪も体もかなり濡れてしまっている。しかし青年はそんなことなど少しも気にしていないようすで、ぼんやりと桜の木がある方向を向いていた。

変な人。

薫はクスリと笑うと、次第に激しくなる雨の中を、軽快な足取り

で学校へと向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4023e/>

梅雨前線

2010年10月8日15時58分発行